

【研究ノート】

幼保小接続に関する一考察 —保育の歌と小学校音楽科の歌—

A Study on the Continuity between Early Childhood and Elementary School Education:
Songs in Nursery and Elementary School

直 江 学 美 (人間科学部こども学科教授)

Manami NAOE (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

筆者は、保育者養成課程と小学校教員養成課程の両課程を有することも学科に所属している。幼保小接続には、幼保小を横断する視座が不可欠であるが、学科内での横断的な議論の過程において、幼保・小それぞれの視点の違いに気づくことが少なくない。学科内での議論は、既存の課題を乗り越えるだけでなく、時に予想を超えた発展的な成果や気づきをもたらす。これら幼保・小の横断的な交流に接していると、所属学科における視点が、長年にわたり指摘されてきた幼保小接続に関する諸課題の解決に資するのみならず、幼保・小それぞれにおける新たな学びや実践につながる可能性もあると感じている。歌を専門とする筆者が、こども学科における教育実践および日常的な気づきを踏まえ、幼保小接続の課題とその解決に向けた歌の可能性を探るための足掛かりとし、研究ノートとして整理した。

〈キーワード〉

幼保小接続 幼保小連携 小学校音楽科 歌

はじめに

幼保小接続における課題は、保育および初等教育の現場でたびたび話題となっている。本稿では、そうした課題に対し「歌」が果たす可能性に注目し、歌が課題解決の一助となる可能性を探ることを目的とする。

筆者は、保育者養成課程と小学校教員養成課程の両課程を有することも学科に所属している。保育と小学校教育の接続に関する課題を考察するにあたっては、幼保小を横断する視座が不可欠であり、それを有することも学科からの考察は重要な意味を持つのではないかと考えた。本稿では、歌を専門とする筆者が、こども学科における教育実践および日常的な気づきを踏まえ、幼保小接続の課題とその解決に向けた歌の可能性を探るための足掛かりとし、研究ノートとして整理するものである。

なお、文中では幼保小接続および本学科における呼称に従い、場合によっては、保育者養成課程や保育を「幼保」、小学校教員養成課程や小学校を「小」とする。

養成課程から幼保小接続を考える

筆者が所属することも学科には、保育者養成課程と小学校教員養成課程のいずれかの課程を受講する学生がおり、

それぞれ幼保・小として在籍する。ごく少数ながら、保育士資格や教員免許を取得せずに卒業する学生も存在するが、大多数の学生が「こども」という大きな枠組みのもとで学びを深めている。

学生は、年次が上がるにしたがい、幼保・小それぞれの専門分野に特化した学修に移行するが、初年次段階においては、同一ゼミへの所属や、共通科目の履修をおこなう。そのため、学科内では幼保・小の領域を超えた自然な交流がみられる。こうした、幼保・小の領域を超えた横断的な交流は、年次が上がり専門的になるにしたがって次第に少なくなる傾向があるが、それでもなお、キャンパス内で顔を合わせたり、互いの活動に触れたりする場面は少なくない。

専門領域を超えた横断的な交流は教員にもあてはまる。教員もまた互いの研究や授業内容、さらには保育と小学校教育における教育の目的や価値観の違いを意識する場面も少なくない。例えば、音楽に関して言えば、筆者が担当する科目は、小学校教員養成課程の学生が履修する「音楽科基礎」「音楽科教育法」、その他、幼保小いずれの学生も履修する「器楽」「声楽」である。一方、学科内には音楽を専門とする教員がもう一名おり、主に保育者養成課程の

学生が履修する「保育内容(音楽表現)」「こどもと音楽表現」「こどもと総合表現」および、筆者と同じ「器楽」「声楽」を担当している。例えば同じ「声楽」であっても、保育者養成課程の学生が履修する「声楽」は主に手遊びや童謡、わらべうたなどが主に扱われる一方、小学校教員養成課程の学生が履修する「声楽」では、唱歌をはじめとする共通教材、手遊びより合唱曲などが多く歌われる。このように教員同士においても、広義には同じ「音楽」という共通領域を担っていても、小学校教員養成課の「音楽」と保育者養成課程の「音楽」では、科目の内容や目的の違いを、学科内で自ずと認識することになる。先述した通り、同じ「声楽」という科目でも、幼保・小では、その目的や学修内容が異なる。

また、一年次の基礎ゼミは、幼保を専門とする教員と小を専門とする教員とが議論や検討を重ねながらカリキュラムを考えているが、議論の過程において、幼保・小それぞれの視点の違いに気づくことが少なくない。多くの場合、幼保小接続に向けた学科内での議論は、既存の課題を乗り越えるだけでなく、時に予想を超えた発展的な成果や気づきをもたらす。

これらこども学科内で展開されている幼保・小の横断的な交流に接していると、こども学科における視点が、長年にわたり指摘されてきた幼保小接続に関する諸課題の解決に資するのみならず、幼保・小それぞれにおける新たな学びや実践につながる可能性もあると感じている。

幼保小接続の動き

ここで幼保小接続についての大まかな動きを、主に、齊藤多江子(2017)の「幼小接続における教育課程の編成に関する研究」、横井紘子(2007)の「幼小連携における『接続期』の創造と展開」、小山優子(2025)の「保幼小連携・接続カリキュラムに関する一考察(1)－文部科学省の架け橋プログラムまでの施策から－」を参考に、また関係する答申や手引き等にも触れながら概観する。

平成10(1998)年6月に中央教育審議会に取りまとめられた答申「新しい時代を拓く心を育てるために」において、「幼稚園・保育所から小学校への接続が円滑に行われるように」や「幼稚園・保育所から小学校への接続が円滑に行われるようにするため、情報提供の充実や教育内容のいっそうの連携が求められる」と幼小小の円滑な接続といっそうの連携の必要性が明記された。その後平成13(2001)年2月の報告「幼児教育の充実に向けて～幼児教育振興プログラム(仮称)の策定に向けて」では、「幼稚園教育と小学校教育との間で円滑な移行や接続を図る観点に立って、幼稚園と小学校の連携を推進する」と示され、具体的に実施すべき施策として「幼稚園と小学校の連携の推進」が掲げ

られた。さらに平成17(2005)年1月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」でも、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行を目指し、幼稚園等施設と小学校との連携を強化する」とされ、教育活動の連続性確保の観点から連携強化が再度明記された。

また、平成21(2009)年には文部科学省と厚生労働省が共同で「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」を作成し、都道府県および市町村の関係部局等への周知がなされた。これにより現場レベルでの実践を支援する体制整備もすすめられた。

しかし、これら一連の動きにもかかわらず、「幼保小接続・連携が十分できている」と考える関係者は多くなかった。同年に小学校・幼稚園・保育所を対象にした校種間連携についての調査をおこなった加藤美穂らによれば、「取り組みの意識と成果」の項目について、「『相互の指導感や子ども感についての相互理解』については、幼保小のスタッフ間で同じく意識されているにも関わらず、その成果についての実感は幼保と小で温度差が生じている」と報告した。その背景として「連携における幼稚園・保育所と、小学校の間での不均衡な関係」をあげ、「連携の目的が小学校の教育を幼稚園・保育所が知る、ということに特化された場合、そこには自ずと幼保側に対等な相互理解の不十分さが実感されることになる」と述べ、幼保小の不均衡な関係は成果の差や幼児教育に対する両者の意識の温度差として表れると指摘する(加藤ら 2011)。2011年の調査結果ではあるが、加藤らの指摘にあるように幼保小の連携・接続の課題に取り組むには、幼保小の均衡な関係が必要不可欠であることを、本稿でも今一度押さえたい。

近年の動きをまとめる。平成22(2010)年11月に、文部科学省から「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」が出され、「接続期」という概念、すなわち幼児期と児童期をつながりとして捉える考え方の普及が必要であることが示された。また、「幼稚園、保育所及び認定こども園と小学校との連携を一層強化し、子どもの学びの連続性の確保の重要性」および「接続期の教育実践事例の提示」の必要性が示された。

その後、課題解決に向けた方向性の一つとして提案されたのが「スタートカリキュラム」である。これは、幼児期と児童期をつなぐ教育実践の橋渡しとなることを目的とし、特に接続期におけるカリキュラムの在り方を問い直す動きとされる。平成27(2015)年1月、文部科学省国立教育政策研究所は調査結果を「スタートカリキュラムスタートブック」にまとめ、さらに平成30(2018)年には、より分かりやすくした「発達や学びをつなぐスタートカリキュ

ラム」を作成した。

さらに令和4(2022)年度には、文部科学省はこれまでの幼保小連携の成果と課題を整理した上で、「幼保小の架け橋プログラム」を打ち出す。このプログラムは、「子供に関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指すもの」とされ、子どもの発達の連続性を保障する教育の質的向上を目的としている。その手引き「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」も作成され、幼児教育と小学校教育がつながり、こどもの発達や学びの連続性を確保するためのヒントの具体例も示された。また、「家庭や地域も一緒に」取り組むことの必要性も示された。これにより、「育ちや学びの連続性・一貫性を意識したカリキュラムに基づいた、教育活動を展開し、発達の特性を踏まえ、その時期にふさわしい生活や活動を通して、資質・能力を育んでいくことが重要」（やまなし幼児教育センター 2023）という視点による、育ちや学びの連続性・一貫性を意識した取り組みが、全国各地でおこなわれている。

また、こどもを取り巻く新たな動きとして、同年6月の通常国会において、こども家庭庁設置法が成立、令和5年4月にこども家庭庁が設置された。これは、政府一体となって「こども政策を総合的に推進する」という方針のもとでの設置である。このように、幼保小接続のみならず、こどもの育ちや学びの連続性・一貫性を後押しする方

針が強く打ち出されている。

このように、こどもの発達や学びの連続性を確保することや、関係機関の接続・連携に視座を置いた政策が長年検討・実施されている。しかし、例えば「幼保小の架け橋プログラム」の中の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が「到達目標」と誤解され、現場における連携の手がかりとして十分に機能していないことが課題として指摘されているなど（杉山実加 2025）、2025年現在においても、幼保小接続の難しさは残っている。

「歌」がつなぐ幼保小

長年にわたり指摘されている幼保小接続に関する諸課題に対して、筆者の所属するこども学科内でおこなわれている授業や講義から課題解決の糸口を探りたい。まず、学科で使用されている教科書から、幼保小接続について考える。

こども学科では、1年生全員が履修する「器楽」の教科書に、『こどものうた100（Child保育実用シリーズ）』を使用している。この『こどものうた100』は保育者向けの楽譜である。『こどものうた100』に収められている曲を次にまとめ、そのうえで、曲を「唱歌」「童謡」「わらべうた」に分類した。

なお、曲名は、『こどものうた 100』の表記のままとし、○印を文部省唱歌、●印をわらべうた、印のついていないものを童謡とする。また、○*印がついているものは、楽譜には文部省唱歌の記載がないが、筆者が文部省唱歌と判断した曲である。（ ）内は筆者の補筆とする。

（表1）『こどものうた100（Child保育実用シリーズ）』掲載曲一覧

春のうた（26曲）	夏のうた（24曲）	秋のうた（20曲）	冬のうた（20曲）	いろいろなうた（30曲）
ちょうちょう ○* チューリップ ぶんぶんぶん ぴよんぴよん かえる こいのぼり かたつむり ○ てんとうむし あめ おかあさん せっけんさん かたたき おたまじゃくし せんせいとおともだち ひらいた ひらいた ● お花が わらった きのいい あひる おかあさん とけいの うた 小鳥の うた かわいい かくれんぼ つばめ あくしゅで こんにちは あめふりくまのこ かえるの がっしょう かいぶつだぞ 春	はを みがきましよう たんじょう日 とんぼの めがね たなばたさま ○* ありさんの おはなし みずあそび こんでった バナナ すうじの うた せんろは つづくよ どこまでも おつかい ありさん 海 ひまわり なみと かいがら トマト たなばたまつり しゃばんだま せみの うた こおるぎ お月さま 月 ○	まつぼっくり やまの おんがくか もみじ いもほりの うた うんどうかい （則武昭彦 作詞／作曲） うんどうかい （増子とし 作詞／本多鉄磨 作曲） まっかな 秋 たき火 メリーさんの羊 小さい秋 みつけた きくの花 おおきな たいこ おおきな くりの きのしたで チューリップ 北の国から	あわてんぼうの サンタクロース 雪 ○ ジングルベル ペンギンちゃん 雪の こぼろ 春よこい ○* うれしい ひなまつり たこの うた ○ やぎさん ゆうびん サンタクロース ねんせいに なったら お正月 雪の ペンギンさん ずいずい すっころばし ● とおりゃんせ ● 思い出の アルバム そつぎょうしきの うた	もりの くまさん はたけの ボルカ おもちゃの チャチャチャ うちゅうせんの うた ふしぎな ポケット てを つなごう いぬの おまわりさん おはようの うた おすもう くまちゃん はしるの 大すき ごんべさんの あかちゃん てのひらを たいように インディアンが とおる 金魚の ひるね おんまは みんな ぞうさん おもちゃの マーチ やまびこ ごっこ アイアイ てを たたきましよう むすんで ひらいて ○ おかえりの うた さよならの うた カレンダー マーチ おなかの へる うた おへそ はしれ ちょうとつきゅう

『こどものうた 100』に掲載されている120曲は、「春のうた」、「夏のうた」、「秋のうた」、「冬のうた」、「いろいろなうた」に分類されている。これは、1年を通して季節や行事に合わせた歌を歌っている保育現場に合わせたものであり、『こどものうた 100』以外でも、保育者向けの楽譜には、四季や行事の分類をもとに曲が配置されているものが多い。唱歌（文部省唱歌）は8曲、わらべうたは3曲、童謡は109曲であった。

（表2）『小学生のおんがく1』（教育芸術社）掲載曲一覧

うたって おどって なかよくなろう (4曲) うたって なかよし セブン ステップス チェッ チェッ コリ ひらいた ひらいた ●	はくを かんじとろう (5曲) さんぽ じゃんけんぽん なまえあそび フルーツ ランド みんなで あそぼう	はくに のって リズムを うとう (5曲) しろくまの ジェンカ かたつむり ○ ぶん ぶん ぶん ことばで リズム うみ ○	みの まわりの おとに みみを すまそう (1曲) おとを さがして あそぼう
どれみと なかよくなろう (7曲) みつばちハニーの ぼうけん たのしく ふこう どんぐりさんの おうち どれみで あいさつ なかよし どれみふあその まねっこ ひのまる ○	せんりつで よびかけあおう (4曲) やまびこ ごっこ まねっこあそび せんりつ まねっこ・おはなし こうしんきょく	がっきと なかよくなろう (3曲) おとさがし さがして みよう ならして みよう シンコーテッド クロック	ようすを おもいうかべよう (3曲) きらきらぼし ほしぞらの おんがく はる なつ あき ふゆ
にほんの うたを たのしもう (3曲) さんちゃんが ● おおなみ こなみ ● おちゃらか ほう ●	みんなで あわせて たのしもう(4曲) あいあい とんくるりん ばんくるりん こいぬの マーチ ラデツキー こうしんきょく	うたいつごう にほんの うた (3曲) たなばたさま ○ おしょうがつ うれしい ひなまつり	みんなで たのしく (10曲) おつかい ありさん ちゅうりっぷ ちょうちょう ○ ぞうさん めだかの がっこう ことりの うた こぶたぬきつねこ こいのぼり いぬの おまわりさん 国歌「きみがよ」

『小学生のおんがく1』（教育芸術社）に掲載されている53曲は、「うたっておどって なかよくなろう」、「はくをかんじとろう」、「はくにのってリズムをうとう」、「みのまわりの おとにみみをすまそう」、「どれみとなかよくなろう」、「せんりつでよびかけあおう」、「がっきとなかよくなろう」、「ようすをおもいうかべよう」、「にほんのうたをたのしもう」、「みんなで あわせたのしもう」、「うたいつごうにほんのうた」、「みんなでたのしく」の題材・テーマに基づいて分類されている。唱歌（文部省唱歌）は5曲、わらべうたは4曲、童謡は44曲であった。なお、「ことばでリズム」のようにリズムに合う言葉を選ぶものや、「おとをさがしてあそぼう」のように歌詞や楽譜のないものも、曲名として掲載されている。

保育者向けの『こどものうた100』と、小学校1年生が授業で使う『小学生のおんがく1』を比較する。まず、分類の観点が異なることがわかる。『こどものうた100』では「季節」や「いろいろな歌」といった保育現場での実践に即した分類がされているのに対し、『小学生のおんがく1』

次に、小学校教員養成課の学生が履修する音楽科教育法で使用する、小学校音楽科の教科書に収められている曲をまとめる。教科書は、筆者の所属大学が所在する市で採用されている『小学生のおんがく1』（教育芸術社）を使用し、曲名や分類は、教育芸術社のホームページ上の表記のままとした。○印を文部省唱歌、●印をわらべうた、印のついていないものを童謡とし、()内は筆者の補筆とする。

では題材・テーマを基に分類されている。これは、保育においては年間を通じて四季や行事に合わせた歌唱活動が中心となっているのに対し、小学校では音楽科の学習指導要領に基づく系統的な学習が基本とされていることが反映されている。例えば「ぶんぶんぶん」は、保育では「春のうた」の曲として歌われ、小学校では、はくにのってリズムをうという題材・テーマの中で歌われる。

次に曲をみていく。『小学生のおんがく1』に掲載されている曲のうち、第一学年の共通教材である、「うみ」「かたつむり」「ひのまる」「ひらいた ひらいた」を除くと、唱歌（文部省唱歌）は2曲、わらべうたは3曲、童謡は44曲となる。童謡の44曲の中には、『こどものうた 100』の中にも掲載されている曲、つまり、保育の中でも扱われる曲が少なくない。とりわけ教科書の冒頭「うたって なかよし」に掲載されている、「おつかい ありさん」「チューリップ」「ちょうちょう」「ぞうさん」「めだかの がっこう」「ことりの うた」「こぶたぬきつねこ」「こいのぼり」「いぬのおまわりさん」は、保育でも歌われている曲であり、幼保

から小への自然な連続性を促す内容となっている。これら共通の曲を幼稚園・保育所・小学校それぞれの保育および教育実践において意識的に活用することは、子どもに心理的な安心感を与えることになる。つまり、幼保小のなめらかな接続に寄与する可能性が高い。このことは、文部科学省が「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」について【はじめに】の中で示した「（質の高い）幼児教育の成果を小学校教育の成果につなげていくことが大切」、「園で体験したこと、学んだことを小学校でいかしていくことによって、小学校教育における子供の学びはもっと豊かになります」という指摘とも通底するものである。

おわりに

保育者養成課程と小学校教員養成課程の両方を有するこ

ども学科に所属し、歌を専門とする筆者が、学科内での教育実践および日常的な気づきを踏まえて、幼保小接続における課題に対して「歌」が果たし得る役割や可能性を探った。ほんの試みではあったが、本稿では、学科内での気づきとともに、幼保小連携の流れを概観し、さらに幼保・小それぞれで使用される教本と教科書を比較し、同じ曲であっても、幼保と小ではその分類や扱われ方が異なることを示した。共通の歌の活用は、子どもにとっての安心感を高め、教育の連続性を支える有効な手立てとなり得るが幼保・小ではその扱われ方が違うことを意識して取り入れる必要がある。今後は、本稿をもとに、歌の実践的活用に関する検討および実践をおこない、幼保小接続における歌の可能性を継続的に探りたい。

参考・引用文献

小原光一 他（2020）『小学生のおんがく1』（教育芸術社）
加藤美帆・北野幸子・高橋尚子（2011）「幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か」『お茶の水女子大学人文科学研究』第7号, 87-98頁。
小山優子（2025）の「保幼小連携・接続カリキュラムに関する一考察(1)－文部科学省の架け橋プログラムまでの施策から－」『島根県立大学松江キャンパス研究紀要』第64巻, 19-29頁。
小林美実 他（2014）『こどものうた100』（チャイルド本社）。
齊藤多江子（2017）「幼小接続における教育課程の編成に関する研究」『こども教育宝仙大学紀要』（こども教育宝仙大学）第8巻, 37-45頁。
杉山実加（2025）「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』における『言葉による伝え合い』の事例分析－保育者及び学生向け書籍の整理を通して－」『名古屋短期大学研究紀要』第63号, 33-41頁。
直江学美 他（2024）「（実践報告）こども学科における初年次教育の取り組み－保幼小連携に着目して」『人間科学研究』（金沢星稜大学学会人間科学部）第18巻, 第1号。
文部科学省（1998）「新しい時代を拓く心を育てるために」平成10年6月答申（中央教育審議会）。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm（閲覧日：2025年7月21日）
文部科学省（2001）「幼児教育の充実に向けて～幼児教育振興プログラム（仮称）の策定に向けて～（報告）」平成13年2月2日（初等中等教育局幼児教育課）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/005/toushin/010204.htm（閲覧日：2025年7月21日）
文部科学省（2005）「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」平成17年1月28日答申（中央教育審議会）。
文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』告示第175号。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf（閲覧日：2025年7月21日）
文部科学省（2010b）『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）』。幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議。
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf（閲覧日：2025年7月21日）
文部科学省（2024）「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」について【はじめに】文部科学省大臣官房審議官（初等中等教育担当）
<https://www.youtube.com/watch?v=5QPElCqZTjM>（閲覧日：2025年7月21日）
文部科学省・厚生労働省（2009）『保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集』。
横井紘子（2007）「幼小連携における『接続期』の創造と展開」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』, 45-52頁。
やまなし幼児教育センター（2023）『やまなし 保幼小連携・接続ガイド～子供の育ちと学びをつなぐ～』令和5年3月。

